ビジョンなき行政施策がもたらす暗雲＝人口流出

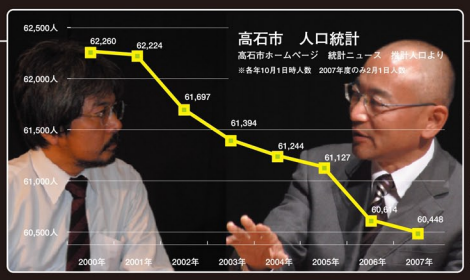
討議資料

人口流出を食い止めろ

子どもを守る施策の充実と情報公開の徹底

人口減少が続く高石において、誇りに思えるような町づくりの将来像とは何か？
また、現在、この町が抱えている表面的には見えにくい問題点とは何なのか？
現、高石市議会議員 木戸あきらさんが考える高石再生のビジョンを聞いてみた。

聞き手：新島 洋



右：木戸あきら

昭和30年生まれ、51歳、妻、子2人の4人家族。中央大学法学部卒業後、伊藤忠株式会社に23年勤務。市民活動として保育所保護者会会長、市民グループ役員を務めた後、平成15年、合併反対の立場で市会議員に当選。子どもを守る施策の充実と情報公開の徹底を主要テーマとしている。

左：新島 洋　にいじまひろし

昭和29年生まれ、ジャーナリスト。著書に『青い空の記憶-大気汚染公害と闘ったひとびとの物語』（教育史料出版会）『踊う首長-自立する地方自治体とは』（同）など。フィリピンのごみ捨て場で働く子どもたち、ユーゴスラビア・コソボ自治州やアフガニスタンの戦場取材などのルポルタージュも多い。

先人が残してくれた財産。小学校が1キロ圏内に1つ、市内に7つもある。隣市に誇れる、この教育環境のハードの良さを最大限に活用すべきです。

新島：「今、高石市に木戸さん自身、どんな問題を感じていますか？」

木戸：「高石は人口減少が続いているのをご存じですか？この6年間で1700人以上減っています。逆に和泉市、泉大津市は増えている。これは近隣自治体と比べて高石市が魅力の薄い町になってることも一因です。この状況のままでは10年、20年後が見えない町になってしまう。この事に私は危機感を覚えました。

高石が自治体として生き残るためには、まずは人口の流出を防がなければなりません。人々がずっと住みたいと言える町にしなければ高石力はなくなってしまう。そういった想いで私自身、この高石力を取り戻すために市民運動で3年、議員として4年間取り組んできました。」

新島：「木戸さんが言う高石力とは？」

木戸：「高石力とは市民が主役となって、自分たちの町を育てることです。今、高石で誇れるものって何だろう？高石が隣市にはない魅力とは何かを考えました。

例えば、大阪で住む場所を選ぶ時、高石はなかなか魅力的な立地条件だと思うんです。難波まで急行で15分、駅だって4つもある。関空まで30分、肝心の子ども達には小学校が1キロ圏内に1つ、市内に7つもある。こんなに教育環境のハードが充実しているのは高石だけですよ。幼稚園、保育所、公民館なども小学校区にそれぞれ１つ以上ありますよね。

このハードを基盤に、子どもを守れる町、子どもを育てやすい町を掲げて行政施策を充実させていけば、若い世帯を中心に他市から人々が集まる。人々が集まれば活気づく！　さらに住み続けたくなる町になる・・・。

小学校施設が狭い範囲に点在している利点を最大限活用する事が、高石力を取り戻す鍵だと思います。」

子どもを守るためには“他人任せの意識”の改革と将来を見据えた先回りしたソフトが必要です。

新島：「子どもといえば、いじめ虐待や自殺など暗いニュースが飛び交っていますが・・・」

木戸：「高石も他人事ではありません。実際に私も自分の子どもの送り迎えで保育所に関わるようになって以来、子どもと教育について触れる機会が多くなりました。今では私の政治活動の大部分を占めますが、活動の中で子どもをとりまく環境がますます悪くなっているのを体感しています。行政窓口に寄せられた子どもからの命の電話は、2000年では17件でしたが2005年には107件にまでなっている。

親にも教師にも友達にも相談できない悩みを抱えた子どもがこの町に沢山いるんです。

子どもを育む環境作りは、7つの小学校に代表されるようなハードに頼るだけでは駄目です。子育て支援・・・言葉だけではなく親身になれる精神を行政に取り戻してほしい。

時代を読んだ先回りした行政（ソフト）が必要です。このハードとソフトが揃ってはじめて機能してゆくと思います。」

新島：「先回りしたソフトとは何でしょう？」

木戸：「先回りとは将来を見据える事。ソフトとはビジョンやアイデアの事です。私たちは高石に何を残して何を捨てるのかを考えていかないといけない。

例えば、自先の経費削減だけに捕らわれて、ビジョンなしに保育所が民営化されようとしています。これは、表面的に経費節減できたとしても（それも怪しいのですが）、保育内容をキチンと把握しなければ、次代を担う子ども達の育成を放棄した事になる。これは、高石が誇れる「子どもを守る高石」を自ら捨てる事になる。

高石を魅力ある町に、活気ある町にしようというビジョン＝（先回りしたソフト）があれば、高石力の根幹になる教育に対しての民営化は、そう簡単にすすめてはいけないはずです。給食の民営化も、図書館の民営化も同様です。

民営化がすべて駄目という事ではありませんが、何でもかんでも掛得勘定だけで“面倒みたくなくなったから民間まかせ”という姿勢の行政に、市民は自分たちを守ってくれると期待するでしょうか？　子どもをこの町で育てたいと思うでしょうか？　老後を過ごしたいと思うでしょうか？　その答えは厳しいものでしょう。」

財政難だから民間まかせ、そんな古い視点しかない行政に市民は自分たちを守ってくれると期待するでしょうか？

私たちがアイデアを出し合えば必ず実現できる世代間交流。それが実現できる適正サイズの町、それが高石なのです。

新島：「行政による先回りのソフト以外に高石再生のために必要なものとは何でしょう？」

木戸：「それは市民が参加する世代間交流できる仕組みづくりです。私自身様々な取り組みをしてますが、例えば、子どもによる防犯マップの作成などが良い例だと思います。これは子どもが自ら作成するのを地域の人でサポートするしくみです。実際に取り組んだ自治体では犯罪防止効果をあげていますし、子ども達を中心に自然な世代交流ができるわけですから、古き良き向こう三軒両隣で連帯感のある高石を取り戻す事もできるんです。そうなれば自ずと防犯力も高まります。

こういったきめ細やかな仕組みづくりが、高石力を底上げする源になると確信します。」

開かれた市政という言葉だけが先行してはいないでしょうか。

新島：「高石市の情報共有、ならびに市民参画についてはどのように考えますか？・・・」

木戸：「今の高石市は市民との情報共有について不充分な自治体だと思います。

例えば、診療センターは、直近の平成17年度決算で5000万円の赤字。これは、高石市がその管理会社に7900万円の補填をした後の金額です。つまり実態は、1億2800万円の赤字なのです。

そのうえ問題は、皆さんからライフケアセンターと親しまれている介護施設で上がる利益を、この診療センターの赤字補填のために使用しているということです（6事業総合通帳より借入れ、1億6000万円）。

これは管理する団体が同じとの理由からですが、私はこれらを分けて管理すべきと議会で主張しましたが、聞き入れられませんでした。高齢者で生じた利益は、高齢者に還元するべきだと思います。

この診療センターはすばらしい施設で、誰でも残したいはずですが、一方で、例えば、子どもたちを守るはずの施設の耐震化は全く進んでいません。大阪府内最低です。市民の皆さんは、診療センターの存続と学校の耐震化のどちらを優先しますか？　こういった重大問題を行政と市民が情報共有して一緒に決定していく時代だと思います。市民参加とは市民と行政との真剣勝負でもあると思います。」

新島：「最近新聞でも高石の入札問題が話題になりましたが・・・」

木戸：「他市に例を見ない工事発注の仕組みが議会の追及で明るみになりました。本来、市が独自で設定する予定価格を、複数の業者からの参考価格を元に決定し、後日、その同じメンバー内の最低価格提示者に発注していました。そのうち予定価格は府内唯一非公開で、そのことが新聞報道されて初めて行政は公開しました。開かれた市政という言葉だけが先行してはいないでしょうか。

これからは古い仕組みを積極的に公開し、市民と一緒になって改革してゆく、そういう政治姿勢が求められていると思います。」

インタビューを終えて

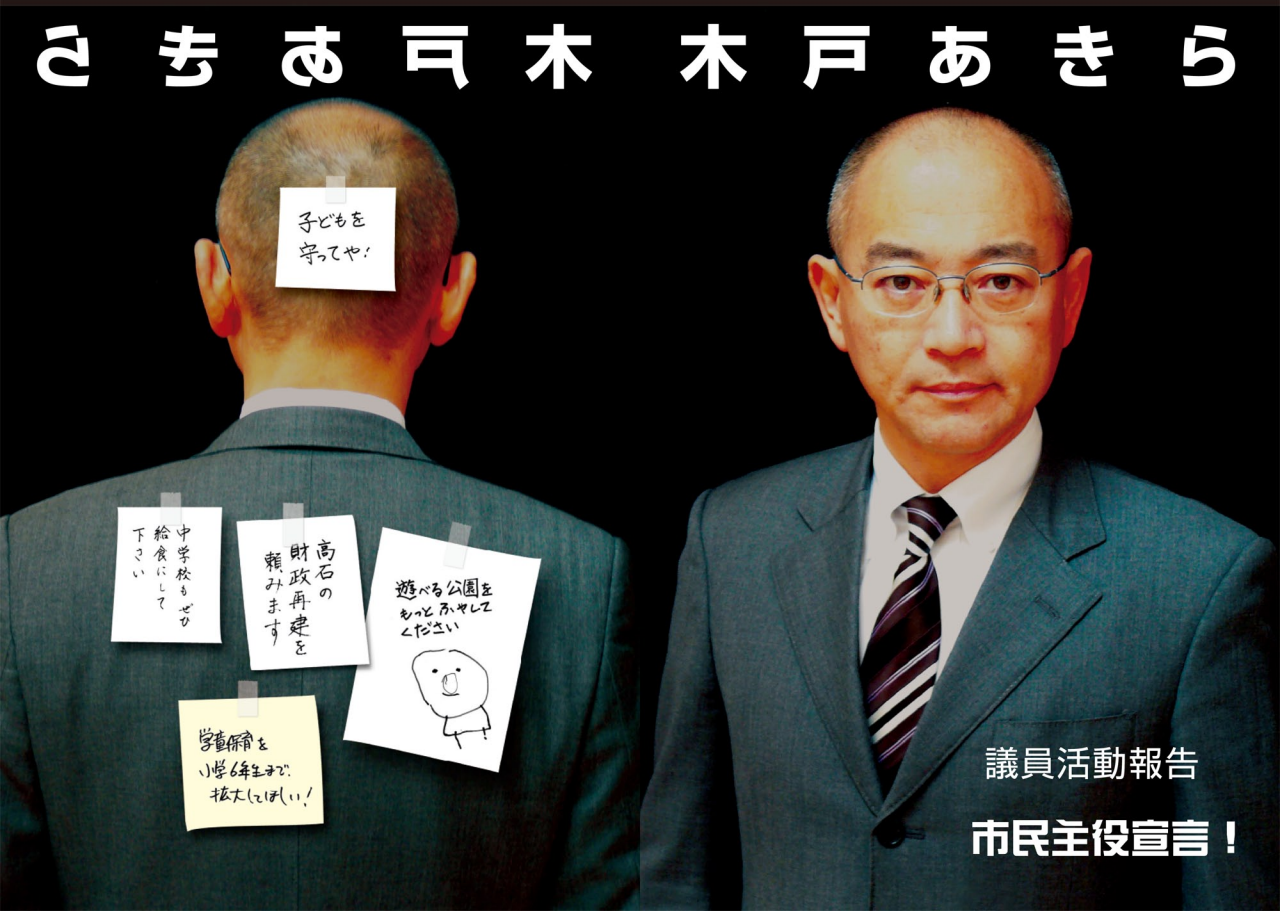
木戸さんから指摘され、高石市が蓄積してきたハード面での充実に改めて驚かされました。にもかかわず人口が減少し続けているのはソフト面に魅力がないからかもしれません。特に子育てに関するソフトはこの数年をみても貧弱になる一方です・・・。教育基本法の改正など、戦後民主主義教育を全否定するような動きが顕著ですが、木戸さんはこの間、世界で最も学力の高いフィンランドの教育実践の紹介や児童虐待問題への取り組みで市民から注目を集めています。営利企業まかせの民営化万能論でなく市民の力を活用する「民話」で、みんなが住み続けたくなる高石市にしていってください。

新島 洋

木戸あきらから皆さまへのメッセージ

高石市は今、お金がありません。合併に反対し、高石市の独立は確保したものの借金の返済に追われています。でも借金の返済だかりに気を取られているうちに、町の誇りも無くそうとしています

私たちは何のために合併しない道を選んだのか？高石市の有形無形の財産を次世代の担い手である高石っ子に伝承するためではなかったのですか？

今は贅沢な施策は打てませんが、子どもを守る施策だけは充実させて、人口流入を図らなければなりません。

市民の皆さんと意見交換できる場をつくって情報を共有し、子ども達を守る施策を一緒に考えましょう！そこから全てが始まるんです！私が思う「高石力」。この力を信じて魅力ある町にしましょう！